

重要です！！

もう一度、ワークショップ型の授業とは何かを考えてみましょう！

モデルを見せるのは、原則一回です。

前年度から、研究協議の時に何度か次のような意見が出されています。

モデルを何度か繰り返し見せるという方法もある

私は、この意見をはっきりとここで否定しておきます。

こうした考えは、従来の「教え込みの授業観」を引きずっているのです。

モデルを何度も繰り返し見せる授業は、「分からせる」授業であり、「知らせようとする」授業なのです。

ですから、モデルを見せれば見せるほど子どもたちの意欲は減退し、教室の雰囲気は重たくなるのです。

子どもたちは、話を聞かされることより、実際に行うことを好むのです。

松井秀喜選手が子どもたちに話を聞かせたとします。

1回目は、キラキラした目で聞くでしょう。

しかし、3回も4回もそれをされるよりは、野球のゲームを1回でもする方を好むでしょう。

私たちが目指す授業は、

「為すこと」によって、「できる」ようにする授業

です。

つまり、モデルを何千回見せて分からせたとしても、「できる」ようにはならないのです。

活動の中で、学ばせ、獲得させるしかないのです。

ここで重要なのは次のような感覚です。

モデルは、万能ではない。一発で決めてすべてのスキルを引き出すことも重要だが、それが完璧でなければ、アクティビティーの中で気づかせ、定着させればよい。

また、こうも言うておきます。

モデルで分かっているのは、8割の子どもでいい。あとの2割はアクティビティーをしている中で気づく。

モデルを見た方が分かる子どももいます。

教室はそういう子こそが多いのです。

しかし、一方で「為すことによって学ぶ子」がいることもまた事実です。

例えば、水泳学習のとき、一応プールサイドで泳法について、言葉で説明して、モデルを見せるわけですね。

それで、多くの子はできるようになるでしょう。

しかし、当然、それではできない子どもがいることも私たちはよく知っていますね。

そうした子どもたちに対して、「ちょっと待ってプールサイドにあがって、もう一度はじめから説明するから」という先生はほとんどいないはずなのです。

むしろ、水中で実際泳がせてみて、手取足取り技能の向上を図るはずで。

「子どもが分かっているから」といって、モデルを繰り返し見せる方法は、プールサイドで繰り返し泳ぎ方を教えることに似ています。

もう一度いいます。

「為すことによって学ばせる」のです。

メインは、モデルを見せることではなくて、子どもたちのアクティビティーです。

ついでです。時間についていいます。

「見つめる」(モデルを見る)段階が、10分以内なら、良い授業です。

本当は7分といたいところですね。

授業開始10分後には、子どもたちの活動が始まっていなければ、ダメな授業と言っていいのです。

つまり、モデルを極力禁欲して、子どもの活動を長くするということです。

さて、次に。

アクティビティーの運営方法です。

アクティビティーの運営で重要なことは、活動を細切れにしないことです。

例えば、「先ず、隣の人と して……」「次に前の人と……」というのも原則はダメです。

なぜかという、細かい指示をしなくてはならないとなると、子どもの見取りが不可能だからです。教師は指示を出すことに気を取られ、子どもを見るという本分ができなくなります。

逆に長い活動にすればするほど、教師は子どもたちを見ることができません。

ですから、「5人と したら座ってね」という指示がいいのです。